

御笠の森遺跡Ⅲ

— 第10次調査 —

大野城市文化財調査報告書

— 第79集 —

2008

大野城市教育委員会

御笠の森遺跡Ⅲ

— 第10次調査 —

大野城市文化財調査報告書

— 第79集 —

2008

大野城市教育委員会

序

御笠の森遺跡は、大野城市山田に所在する市指定文化財「御笠の森」の周囲に広がる遺跡です。

この遺跡では、これまで弥生時代から江戸時代にわたる遺構・遺物が大量に出土し、後の「山田村」につながる大きな集落が営まれていたことがわかっています。

今回報告する第10次調査は、平成14年11月から12月にかけて発掘調査を実施いたしました。発掘調査を行った面積は狭いものでしたが、平安時代から鎌倉時代の掘立柱建物跡、井戸跡などが発見され、集落の広がりや変遷を考える上で、貴重な成果を得ることができました。

もちろん、今回の発掘調査だけでは、解決できない問題も山積していますが、こうした一つ一つの成果をつなぎ合わせていくことによって、より生き生きとした先人たちの暮らしぶりが明らかになってくるものと期待しています。その一環として、本書が多くの方々に活用され、地域史解明の手掛かりとなれば幸いです。

最後になりましたが、周辺にお住まいの方々には、多大なご協力を頂きました。心から感謝申し上げます。

平成20年3月31日

大野城市教育委員会
教育長 古賀 宮太

例 言

1. 本書は、大野城市教育委員会が発掘調査を実施した、大野城市山田2丁目228-1所在「御笠の森遺跡第10次調査」の報告である。
2. 遺構の分類番号は、SB:掘立柱建物跡、SD:溝跡、SE:井戸跡、SX:土坑・不明遺構、SP:ピットとしている。
3. 遺構写真は、平島義孝が撮影した。
4. 遺構図は、平島・林潤也が作成した。
5. 遺物実測図は、城門義廣が作成した。
6. 製図は、渡部美香が行なったが、遺構配置図に関しては、(株)埋蔵文化財サポートシステムに委託した。
7. 観察表は、大里弥生が作成した。
8. 遺物番号は、通し番号とした。
9. 第1図は、国土地理院発行の地形図『福岡南部』を基に作成した。
10. 本遺跡の遺物・実測図・写真は全て大野城市教育委員会にて管理・保管している。
11. 本書の執筆および編集は林が行なった。

本文目次

I. はじめに	
1. 調査に至る経緯	1
2. 調査体制	1
II. 位置と環境	
1. 地理的環境	2
2. 歴史的環境	2
3. これまでの調査	4
4. 文献から見た「御笠の森」	7
III. 調査の結果	
1. 調査の概要	9
2. 遺構と遺物	9
(1) 掘立柱建物跡	9
(2) 井戸跡	11
(3) 土坑	11
(4) ピット	14
(5) 調査区南壁面	14
IV. まとめ	
1. 各遺構の時期	16
2. 中世～近世遺構の広がりと「御笠の森」	16

表 目 次

第1表	御笠の森遺跡調査一覧	6
第2表	出土遺物観察表	15

挿図目次

第1図	周辺遺跡分布図 (1/25,000)	3
第2図	御笠の森遺跡の調査地点 (1/2,500)	5
第3図	江戸時代中～後期の「御笠の森」周辺 (『筑前国続風土記付録』)	8
第4図	遺構配置図 (1/100)	9
第5図	遺構切り合い図 (1/150)	10
第6図	SB01実測図 (1/60)	10
第7図	SE01実測図 (1/30)	11
第8図	出土遺物実測図 (1/3)	11
第9図	SX01～03実測図 (1/30)	12
第10図	SX05～07実測図 (1/30、1/40)	13
第11図	調査区南壁面土層実測図 (1/40)	15
第12図	第9次調査5・6区、10次調査区遺構配置図 (1/200)	17・18
第13図	第3・4・8・9次調査区画溝配置図 (1/1,500)	19

図版目次

本文図版 (1)	昭和30年頃の御笠の森	8
本文図版 (2)	現在の御笠の森	8
図版1	(1) 調査区全景 (北から) (2) SB01完掘状況 (北から)	
図版2	(1) SE01完掘状況 (西から) (2) SX01完掘状況 (北から)	
	(3) SX02完掘状況 (北から)	
図版3	(1) SX07完掘状況 (北から) (2) 調査区南壁面土層観察状況 (北から)	
	(3) 調査区西壁面土層観察状況 (東から)	

I. はじめに

1. 調査に至る経緯

御笠の森遺跡は、1988年に福岡県教育委員会により発掘調査が行なわれて以来、共同住宅建設や県道建設などに伴いこれまで11次（10回）にわたる発掘調査が実施されている。この結果、弥生時代から江戸時代にわたる複合遺跡であることが確認され、特に12世紀～17世紀後半には、ほぼ継続的に大規模な集落が営まれたことが明らかとなっている。

今回の調査（第10次調査）は、市有地であった当該地が県道建設に係る事業代替地として売却され、駐車場が建設されることを契機としている。当該地は、隣地の状況から判断して遺構が広がることが確実であり、本市街路課（県道代替地担当）との協議の結果、市有地の段階で市単費事業として発掘調査を実施することとした。

調査は、平成14年11月7日から12月18日にかけて行い、隣地で進めていた御笠の森遺跡第9次調査（県道建設に起因する調査）と並行して実施した。特に第9次調査5区とは調査区が繋がった状態で調査を進めることとなった。

なお、出土遺物の整理・報告書作成については、平成19年度に行った。

2. 調査体制

発掘調査（平成14年度）

大野城市教育委員会	教育長	堀内 貞夫
	教育部長	鬼塚 春光
	社会教育課長	秋吉 正一
	文化財担当係長	舟山 良一
	主査	徳本 洋一
	主任技師	石木 秀啓 丸尾 博恵
		林 潤也（調査担当）
	主任主事	大道 和貴（庶務担当）
	囑託	上田 恵 岸見 泰宏 島田 拓
		元吉 知子 平島 義孝（調査担当）

整理作業（平成19年度）

大野城市教育委員会	教育長	古賀 宮太
	教育部長	小嶋 健
	ふるさと文化財課長	舟山 良一
	文化財担当係長	中山 宏（庶務担当）
	主査	徳本 洋一 石木 秀啓 丸尾 博恵

主任技師	林 潤也（整理担当）	早瀬 賢
技師	上田 龍児	
囑託	石川 健（7月～）	井上 愛子 遠藤 茜
	大里 弥生（10月～）	城門 義廣（～8月）
	田尻 義了（～6月）	能塚 由紀

Ⅱ．位置と環境

1．地理的環境

御笠の森遺跡は、大野城市山田2・3丁目に所在する。御笠川西岸の沖積平野上に立地し、遺構面の標高は13.8～14.1mを測る。近世集落の廃絶後、長らく水田地帯として利用（第3図、本文図版1）され、戦後になって急激に宅地化が進展した地域である。

遺跡は、市指定文化財「御笠の森」の周囲に広がっており、今回の調査地点の小字名は、「御笠森」に該当する（第3図）。また小字名に残らないが、以前この辺りを「古屋敷」と呼称していたといい、遺跡の存在を強くうかがわせている。

2．歴史的環境

ここでは、御笠川西岸域を中心に周辺遺跡を概観してみたい（第1図）。

旧石器時代～縄文時代の遺構・遺物は、御笠川西岸の洪積段丘上に分布している。麦野B・C遺跡、雑餉隈遺跡、板付遺跡からは、旧石器時代のナイフ形石器、三稜尖頭器、台形石器などが出土し、人間活動の痕跡が当該期まで遡ることがわかる。縄文時代の遺跡は、石勺遺跡、板付遺跡で早期の押型文土器が出土し、また縄文時代の可能性が高い「おとし穴」状遺構が、麦野B遺跡、南八幡遺跡、駿河遺跡、石勺遺跡で確認されているが、質・量ともに恵まれているとはいえない。

弥生時代になると、遺跡数は爆発的に増加する。板付遺跡（早期～後期）では、早期の水田遺構、前期の環濠集落が検出され、弥生文化成立期の様相を知るうえで必要不可欠な遺跡といえる。これ以外にも重要な遺跡は多く、居住域では、村下遺跡（前～後期）、雑餉隈遺跡（前～中期）、井相田C遺跡（前～中期）、麦野C遺跡（前・後期）、森園遺跡（中期）、中・寺尾遺跡（中期）、ヒケシマ遺跡（中期）、松葉園遺跡（中期）、石勺遺跡（中期）などが、墓域としては、中・寺尾遺跡（前期）、塚口遺跡（前期）、御陵前ノ楸遺跡（前期）、金隈遺跡（前～中期）、森園遺跡（中期）、ヒケシマ遺跡（中期）、石勺遺跡（中期）、立石遺跡（中期）などが挙げられる。なお奴国の中心とされる須玖岡本遺跡は、西へ2.5kmの距離に位置する。

続く古墳時代には、仲島遺跡、森園遺跡、石勺遺跡、原ノ畑遺跡、川原遺跡、南八幡遺跡、高畑遺跡、などで集落遺跡が確認され、御笠川の東側、月隈丘陵沿いには持田ヶ浦古墳群、御陵古墳群、堤ヶ浦古墳群、影ヶ浦古墳群など、合計200基を超える群集墳が築造されている。

奈良・平安時代の遺跡としては、人面墨書土器が出土した仲島遺跡や井相田C遺跡、古代寺院あるいは那珂郡衙推定地とされる高畑遺跡、官衙的遺構群が検出された立花寺遺跡、奈良時代の集落



1. 板付遺跡 2. 仲島本間尺遺跡 3. 高畑遺跡 4. 諸岡遺跡 5. 仲島遺跡 6. 井相田C遺跡 7. 麦野B遺跡
 8. 麦野A遺跡 9. 麦野C遺跡 10. 南八幡遺跡 11. 三筑遺跡 12. 川原遺跡 13. 御笠の森遺跡 14. 宝松遺跡
 15. 村下遺跡 16. 雑餉隈遺跡 (大野城市) 17. 雑餉隈遺跡 (福岡市) 18. 川久保B遺跡 19. 須玖遺跡群 20. 石勺遺跡
 21. 瑞穂遺跡 22. 原ノ畑遺跡 23. 後原遺跡 24. 駿河遺跡 25. 春日公園内遺跡 26. 先ノ原遺跡 27. 立石遺跡
 28. 立花寺遺跡 29. 金隈遺跡 30. 観音ヶ浦古墳群 31. 持田ヶ浦古墳群A群 32. 影ヶ浦古墳群 33. 堤ヶ浦古墳群
 34. 持田ヶ浦古墳群B群 35. 持田ヶ浦古墳群C群 36. 持田ヶ浦古墳群D群 37. 御陵古墳群 38. 塚口遺跡
 39. 御陵前ノ椽遺跡 40. 森園遺跡 41. 中・寺尾遺跡 42. ヒケシマ遺跡

第1図 周辺遺跡分布図 (1/25,000)

遺跡である南八幡遺跡、麦野A・B・C遺跡、集落と官衙的遺構群が検出された雑餉隈遺跡、平安時代の集落である御供田遺跡、8世紀中頃～後半の火葬墓が確認された石勺遺跡などが挙げられる。なお、麦野遺跡を中心とする奈良期の集落遺跡は、8世紀中頃～後半に突如出現・盛行し、9世紀代には姿を消す点が注目されており、政策として意図的に集落が形成された可能性が高い。また、当該期の官道は、水城西門および東門を通る2ルートが推定されており、そのうち東門ルートは、井相田C遺跡、高畑遺跡でその痕跡が検出され、御笠の森遺跡を横断するルート（註1）が想定されている。

中世の遺跡では、集落遺跡としては13世紀代を中心とした薬師の森遺跡や立花寺遺跡、15～16世紀の麦野A遺跡が挙げられ、墓地遺跡としては、森園遺跡（12世紀）、中・西コモリ遺跡（12～13世紀）（註2）、麦野C遺跡（12～13世紀）で、塚口遺跡（10～13世紀）などが挙げられる。また15世紀の墨書木札類を多量に出土した井相田C遺跡も注目される。やや離れるが、北西約7.1kmには中近世の都市遺跡である博多遺跡群、北西約2.7kmに14～16世紀の館跡である諸岡遺跡、南西約4.0kmに12～18世紀の館跡・集落跡である上白水館跡が位置し、中世集落の構造を比較検討するうえで興味深い。なお、戦国期の山城では、唐山城が北東に約2.5km、岩屋城が東に約4km、不動城が南へ約5kmに位置する。

近世の遺跡としては、後原遺跡の調査成果が特筆される。この遺跡は近世白木原村の一集落「本村」に相当することが知られ、21次にわたる調査の結果、近世村落の景観を復元する上で興味深い成果を得ている。また、本遺跡の近くでは、雑餉隈遺跡（註3）でVOC銘の染付皿をはじめとする近世後半期の遺構遺物が出土しているほか、村下遺跡、宝松遺跡などでも当該期の遺構が確認されている。

3. これまでの調査

御笠の森遺跡1～11次調査の一覧は第1表、調査地点は第4図のとおりである。

今回報告する10次調査の隣接地にあたる9次調査の成果（註6）を中心に遺跡の動態を概観すると、次のようになる。

I 期（弥生時代～古墳時代）：溝や土坑が散漫に分布するが、安定した集落は確認できない。

II 期（8世紀）：8次調査で竪穴住居跡、9次調査で井戸跡が検出されたほか、墨書土器や石帯（丸軋）が出土した。官道（水城東門ルート）との関連が注目される。

III 期（9世紀～11世紀前半）：遺構・遺物とも確認できない。

IV・V 期（11世紀中頃～14世紀）：9次調査4区～5区を中心として、比較的広い範囲に集落（掘立柱建物、井戸跡、土坑など）が展開する。

名 称	調査地番	調査期間	調査面積	内 容	備 考
御笠ノ森遺跡	山田2丁目 235-1	1988.4	552㎡	掘立柱建物3棟（古代？）	県教委調査 県報告88集（註4）
欠番					
御笠の森遺跡 第3次調査	山田2丁目 227-1	1989.9～10	300㎡	ピット・土坑多数 （平安・鎌倉）、溝（江戸）	市教委調査 未報告
御笠の森遺跡 第4次調査	山田2丁目 227-2	1990.6～7	529㎡	土坑（鎌倉）、溝（江戸）	市教委調査 未報告
御笠の森遺跡 第5次調査	山田2丁目 484-3・5	1991.4	238㎡	掘立柱建物1棟（時期不明）	市教委調査 未報告
御笠の森遺跡 第6次調査	山田2丁目 505-1・3	1993.11	150㎡	溝・土坑（中世？）	市教委調査 未報告
御笠の森遺跡 第7次調査	山田1丁目 520-1	1998.9～11	359㎡	溝・土坑（弥生・古墳）	市教委調査 未報告
御笠の森遺跡 第8次調査	山田2丁目 232-2・3	1999.4～ 2000.1	1767㎡	竪穴住居（奈良）、土坑・ ピット多数、溝跡（江戸）	市教委調査 未報告（註5）
御笠の森遺跡 第9次調査	山田2・3丁目	2001.10～ 2004.2	5152㎡	掘立柱建物、井戸跡、土坑、 溝跡（弥生～江戸）	市教委調査 市報告63・65集 （註6）
御笠の森遺跡 第10次調査	山田2丁目 228-1	2002.11～12	98㎡	掘立柱建物、井戸跡 土坑（中世）	市教委調査 本報告
御笠の森遺跡 第11次調査	山田2丁目 173-5	2004.12～ 2005.1	70㎡	溝・土坑（古墳？）	市教委調査 未報告

第1表 御笠の森遺跡調査一覧

Ⅵ期（15～16世紀）：15世紀の遺構は極めて少ないものの、16世紀になると広い範囲で、方形区画溝が展開する。方形区画は規則的に計7箇所確認され、一辺20～75mを測る。各区画内の遺構密度は総じて高くない。

Ⅶ期（17世紀）：17世紀中頃～後半には、全ての方形区画溝は埋没し、集落は終焉を迎える。18世紀に終纂された『筑前国続風土記拾遺』の山田村の項には「此村昔は御笠の森の辺りにあり、延宝のころ今の地に移せり」と記され、「御笠の森」の周辺にあった山田村が、延宝年間（1673～1681年）に移転したことが明記されている。当該遺跡の立地および終焉時期を勘案すると、御笠の森遺跡は旧山田村に相当すると考えられる。

Ⅷ期（18世紀以降）：上限は明らかにできないが、戦後宅地化されるまで、水田地帯として利用されていた。

4. 文献から見た「御笠の森」

今回の調査区に隣接する市指定文化財「御笠の森」は、かつて広い水田地帯の中にあつて、まるで孤島のような風景（本文図版1）であつたという。付近を、日田街道や古代官道（水城東門ルート）が通るためか、古くから認知されており、神功皇后伝説をはじめ、文献上に数多くの記載がある。

名称の由来については、『日本書紀 巻第九』に記載されている。これによれば、神功皇后が、荷持田村（推定地：朝倉市秋月周辺）に住む羽白熊鷲を討伐するために橿日宮（推定地：福岡市東区香椎）から松峽宮（推定地：筑前町栗田）に遷る途中、突然つむじ風が吹き、皇后の笠が森の木に引っ掛かり、これに因んでこの一帯を「御笠」と名付けるようになったという。このほか、奈良・平安期の『万葉集』や『新千載和歌集』に「御笠の杜」・「御笠の森」の記述が見られ、15世紀の『筑紫道記』にも、太宰府から博多に向かう途中に「御笠の杜のかげを過ぎて」という記述がある。

その後、18世紀の『筑前国続風土記』に詳細な記述がある。この中では神功皇后伝説の他に、「むかしは此森の廻りに山田村有。近年雑餉隈のひかしのかたわらにうつせり。」「むかしは此森の下に、神功皇后の御社ありしが、…（中略）…今は社もなくなれり。」「むかし此所に十六三郎天神あり。今は雑餉隈の東の新村にあり。」「むかしは大木多くありて、茂れる林なりしが、今は昔の森のしるしとして、楠二株残れり。」という記載が確認される。つまり、①もともと森の周囲にあつた山田村が移転したこと（『筑前国続風土記拾遺』山田村の項の記載から、その年代は延宝年間（1673～1681年）、②森の中にあつた宗教施設（「神功皇后の御社」「十六三郎天神」）も移転あるいは消失したこと、③18世紀には大木を殆ど失い、往時の姿を残さないこと（宗教施設の移転による里山化の可能性）が記されている。さらに『筑前国続風土記付録』（第3図）には、山田村の居住域から少し離れた場所に森が描かれており、当時の景観をよく示している。

註

（註1）山村信榮氏の推定復元ルートによれば、御笠の森遺跡第9次調査6区と7区の間を横断することになる。当該地については、試掘調査の結果、遺構を確認することができなかった。

山村信榮 1993「太宰府周辺の古代官道」『九州考古学 第68号』九州考古学会

（註2）森園遺跡の一角に位置する。 副島邦弘 1978『中・西コモリ遺跡』大野城市教育委員会

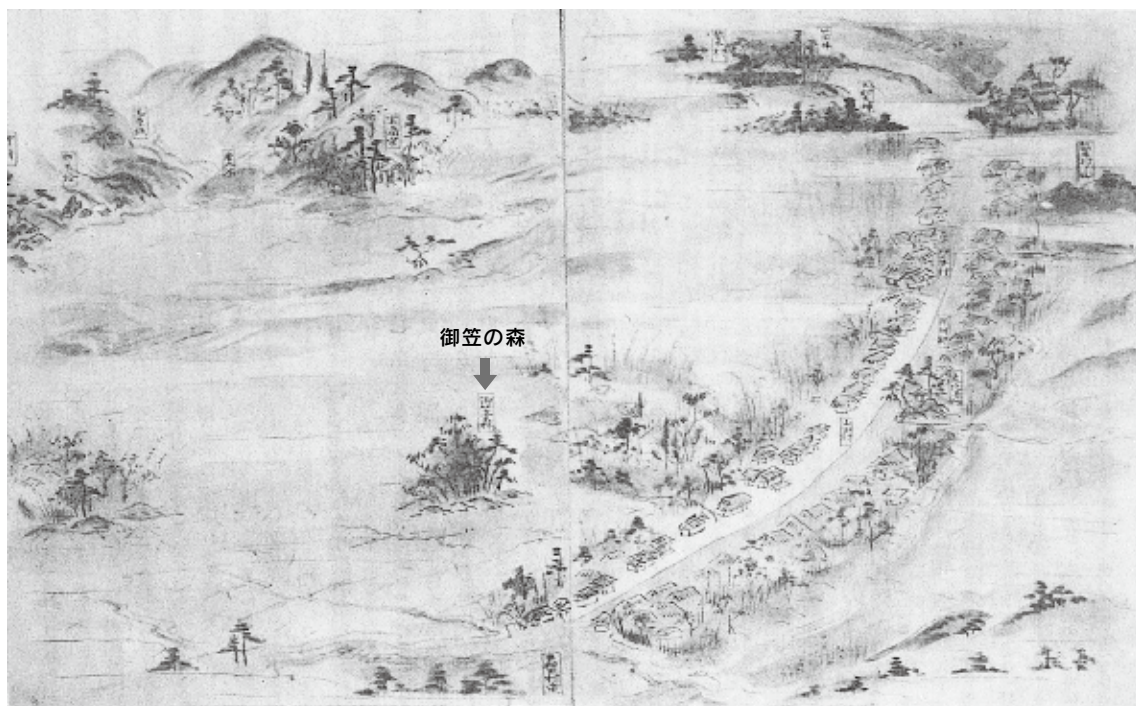
（註3）近世雑餉隈村は日田街道に面し、宿場（間宿）として栄えていたことが知られている。

（註4）浜田信也 1989『御笠ノ森遺跡』福岡県教育委員会

（註5）大野城市教育委員会 2001『大野城市の文化財 第33集』大野城市教育委員会

（註6）林潤也 2004『御笠の森遺跡Ⅰ』大野城市教育委員会

2005『御笠の森遺跡Ⅱ』大野城市教育委員会



第3図 江戸時代中～後期の「御笠の森」周辺（『筑前国続風土記付録』）



本文図版（1）
昭和30年頃の御笠の森
(赤司岩雄氏撮影)



本文図版（2）
現在の御笠の森

Ⅲ．調査の結果

1．調査の概要

市指定文化財「御笠の森」の北東側隣地に位置し、調査面積は98㎡を測る。現地表下1.0m、暗黄褐色土上面が遺構検出面に相当する。遺構検出面の標高は約14.4m、調査区内における明確な高低差はない。

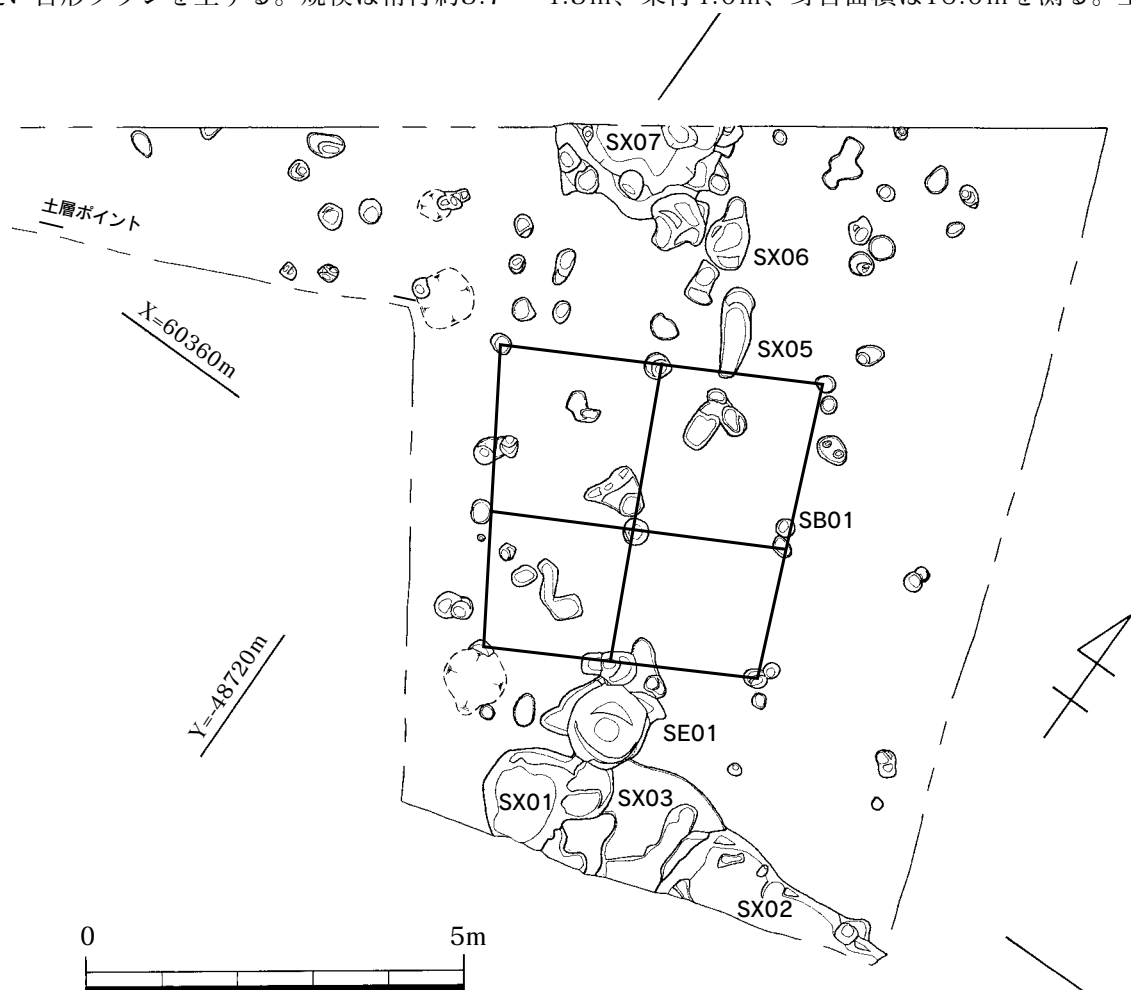
調査は、調査区北側で進めていた御笠の森遺跡9次調査と併行して実施し、特に5－1区とは調査区が結合した形で進行することとなった。このため、遺構の中には、両調査区にまたがる遺構(SX07＝9次調査5区SX01)も確認された。

調査の結果、掘立柱建物跡1棟、井戸跡1基、土坑7基等を検出し、遺構密度は高くないものの、中世期の遺跡の広がり、当時の「御笠の森」の在り方を検討する上で、興味深い資料を得ることができた。

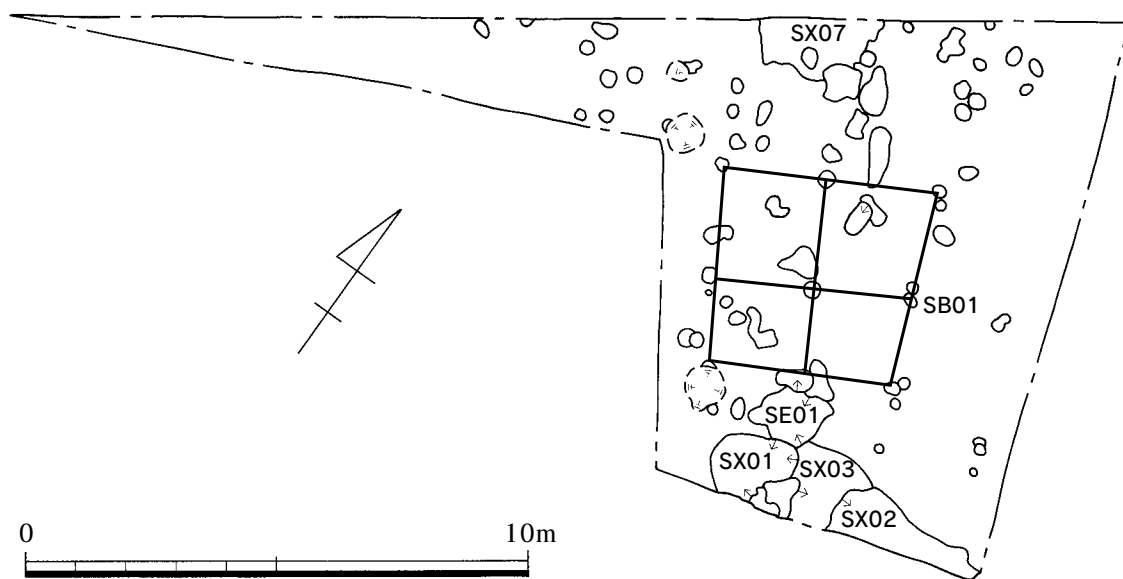
2．遺構と遺物

(1) 掘立柱建物跡

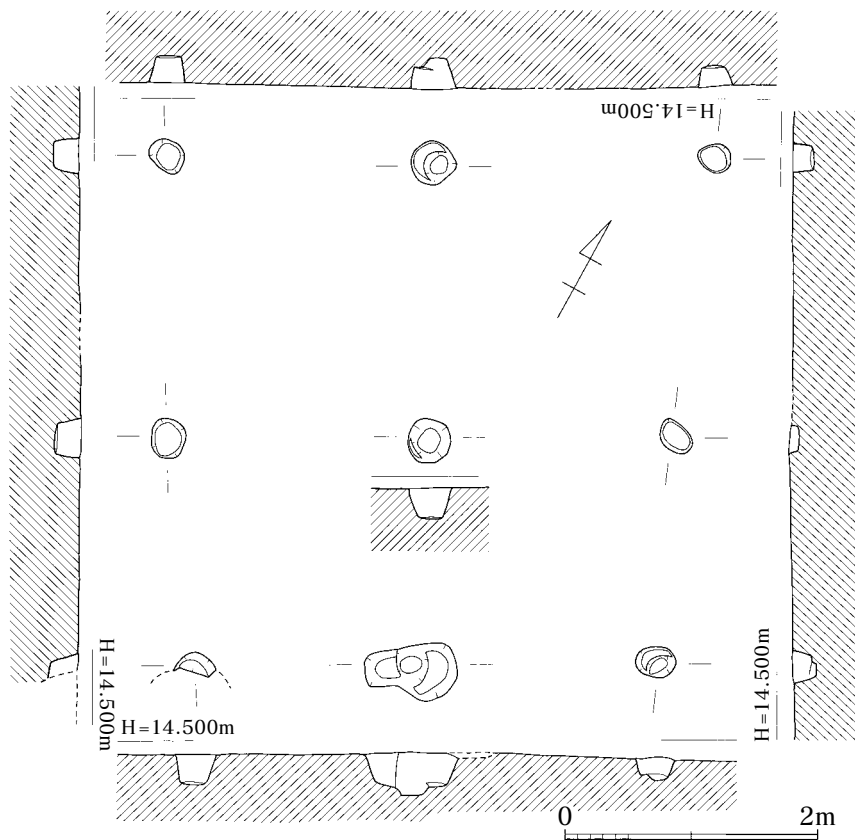
SB01（第6図） 調査区ほぼ中央で検出した2間×2間の総柱建物跡である。平面は正方形に近い台形プランを呈する。規模は桁行約3.7～4.3m、梁行4.0m、身舎面積は16.0㎡を測る。主



第4図 遺構配置図 (1/100)



第5図 遺構切り合い図 (1/150)



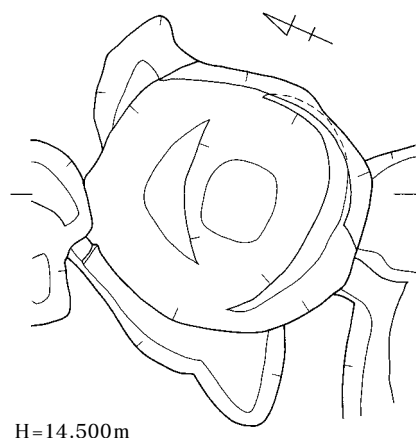
第6図 SB01実測図 (1/60)

軸方向は、GN-29°-Wに向く。柱穴は直径20～48cmの円形プランを呈し、検出面からの深さは8～34cmを測る。埋土は、基本的に黒褐色土（10YR2/2）の単層が基本となり、平面・断面観察の結果、柱痕は確認できなかった。

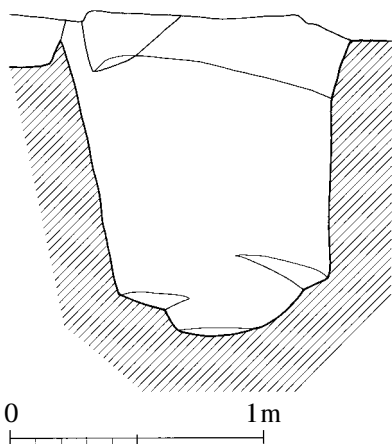
遺物としては、瓦器碗片、土師器片が出土したが、図化に堪えるものはない。

（2）井戸跡

SE01（第7図） 調査区南側で検出した井戸跡で、SX03を切り、SB01、SX01に切られる。平面1.05m×1.12mの円形プランを呈し、検出面からの深さは126cmを測る。断面形は、やや上部が広がった円筒形を呈し、底面付近では、2段のテラスを有する。調査時には湧水は確認できなかった。



H=14.500m



第7図 SE01実測図（1/30）

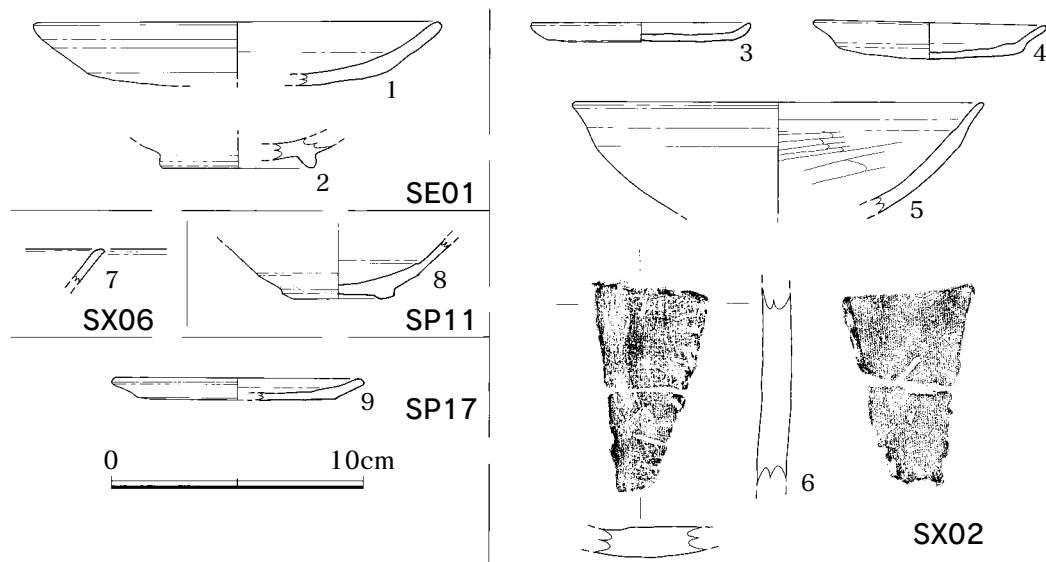
遺物（第8図） 1は土師器杯。口径16.2cmを測る。底部ヘラ切りの可能性が高い。2は土師器碗。これ以外に、瓦器片、須恵器片（甕類）が出土した。

（3）土坑

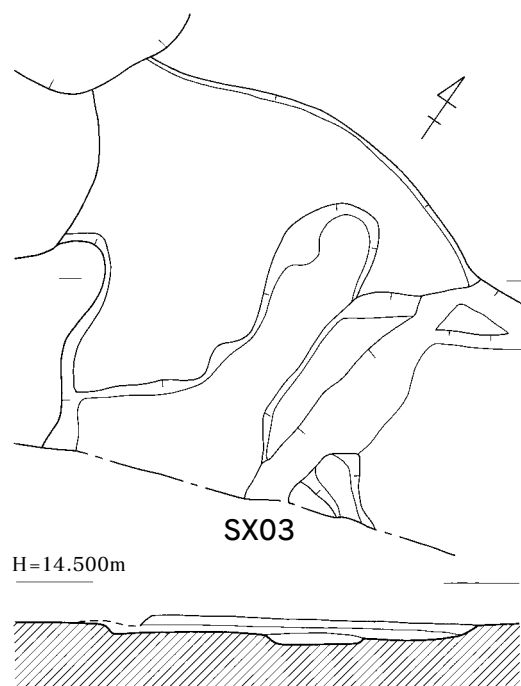
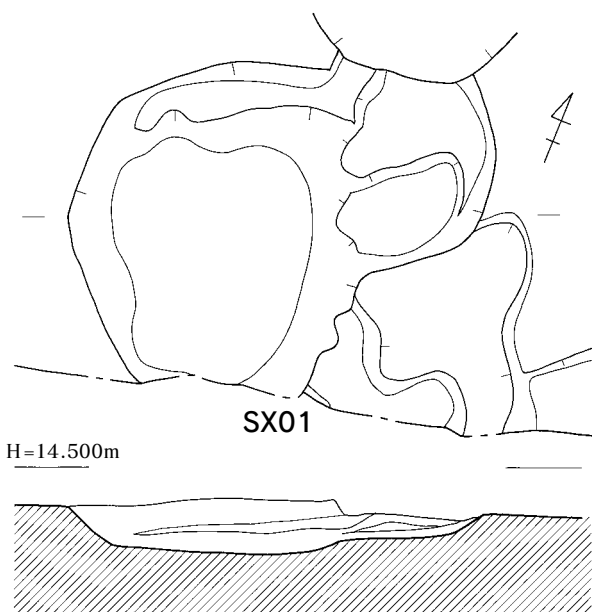
SX01（第9図） 調査区南壁際で検出した土坑で、SE01、SX03を切る。南側の一部は調査区外に続く。平面1.64m×1.30m以上の歪な円形プランを呈し、検出面からの深さは最大23cmを測る。埋土は、黒色土（10YR2/1）の単層であった。

遺物としては、土師器片、瓦器片、焼粘土塊（スサ状の物質混入）が出土したが、図化に堪えるものはない。

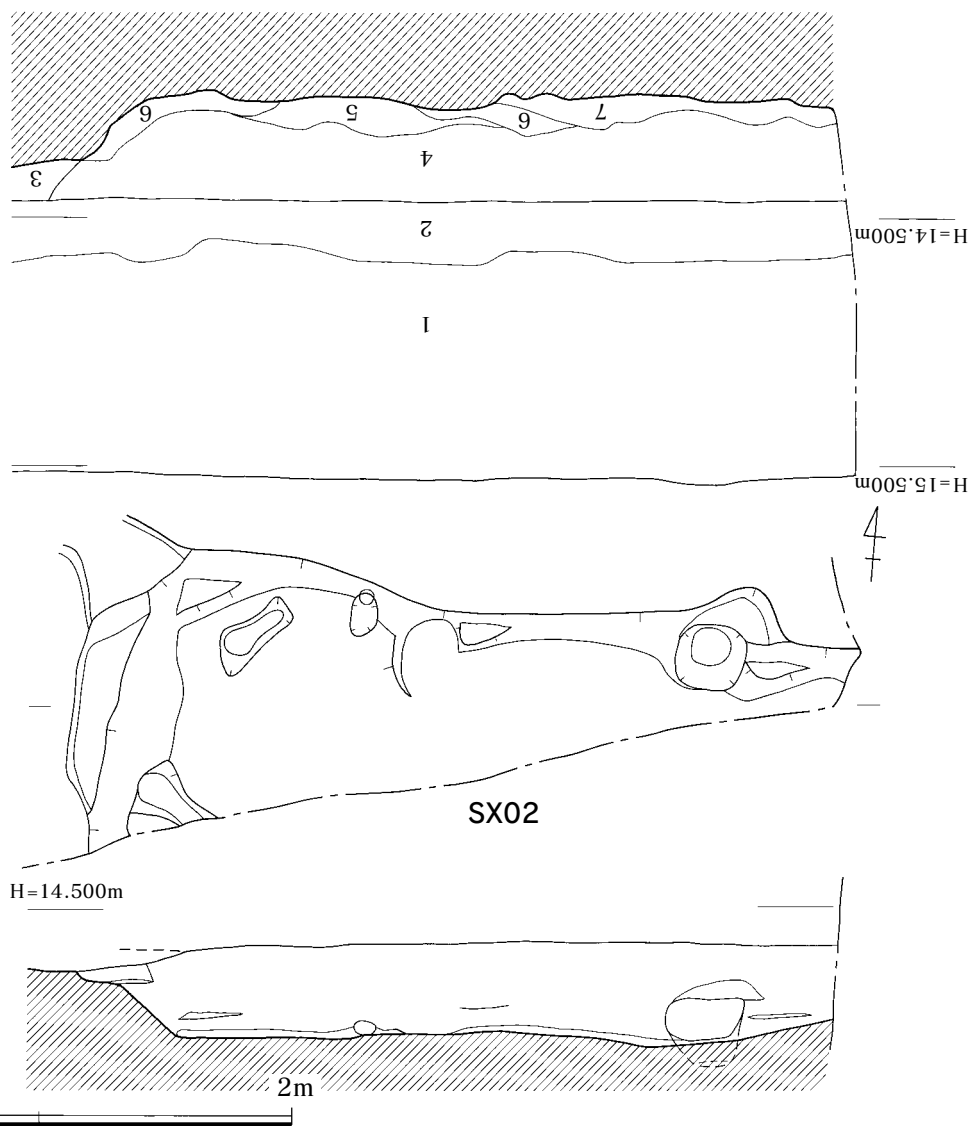
SX02（第9図） 調査区南東隅で検出した土坑で、SX03を切る。南側の大部分は調査区外に続いたため、形態・規模とも判然としないが、一辺2.8m以上の方形プランを呈するものであろうか。検出面からの深さは最大46cmを測る。埋土は、黒褐色土を主体とし、その堆積状況から判断して自然堆積の可能性が高い。



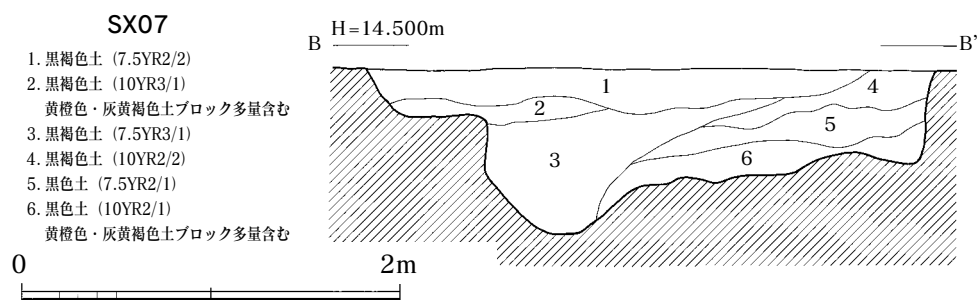
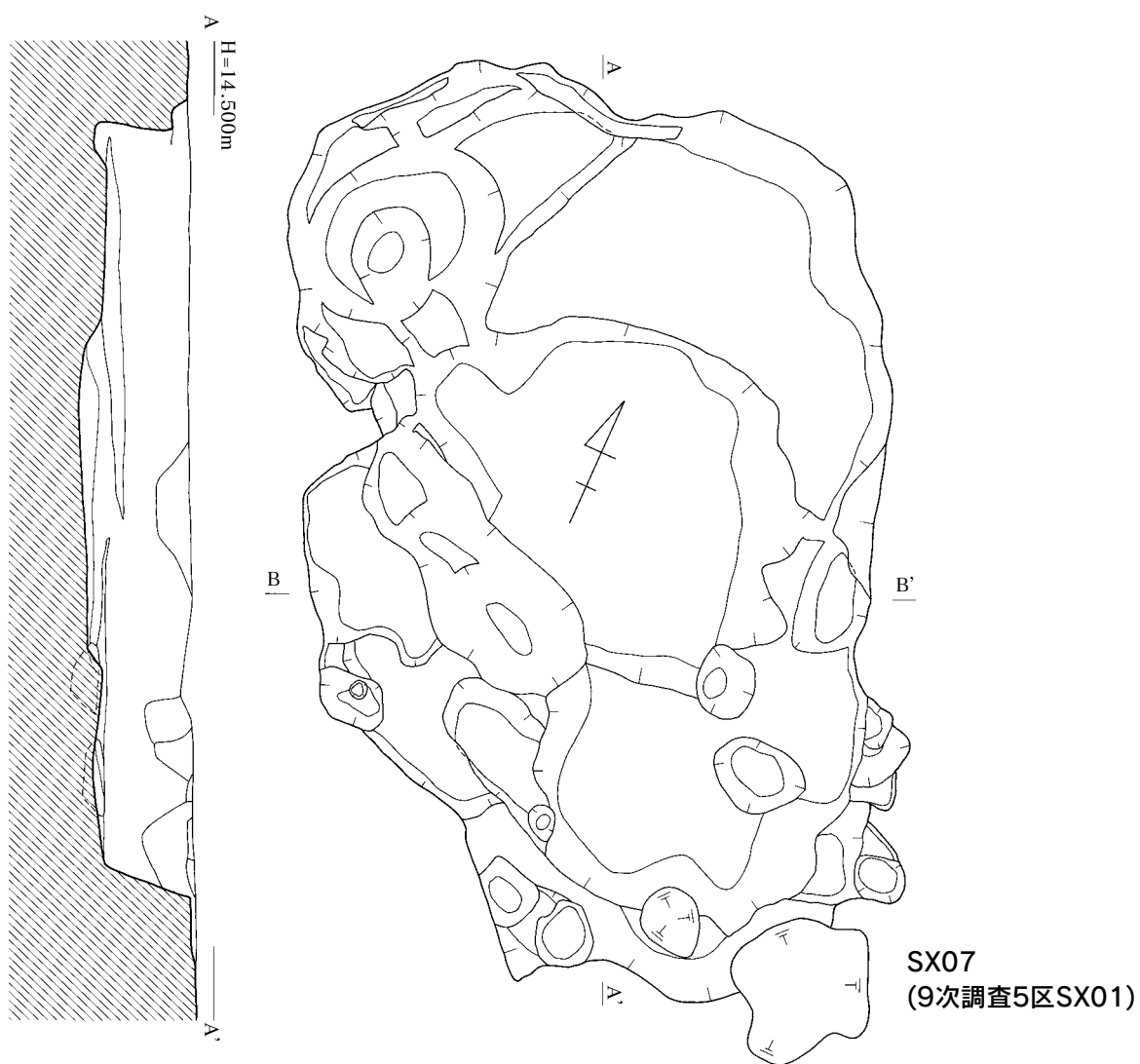
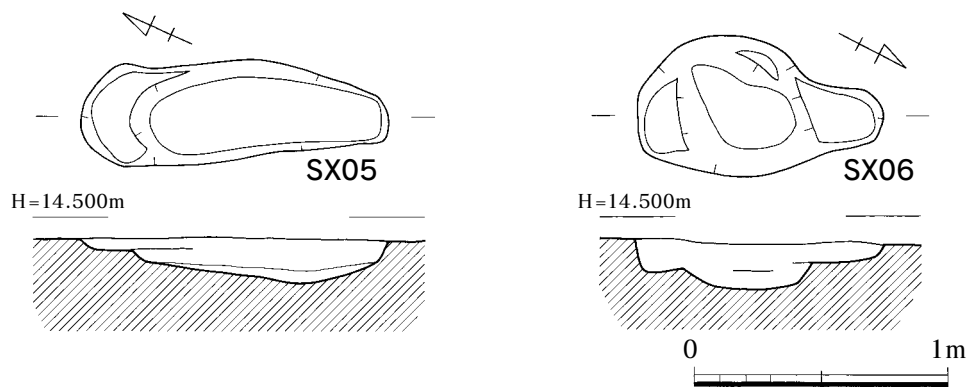
第8図 出土遺物実測図（1/3）



- SX02**
1. 浅黄橙色土 (10YR8/3) 客土
 2. 褐灰色土 (10YR4/1)
粘質、耕作土
 3. 暗褐色土 (10YR3/3)
黄橙色土ブロック少量含む、
SX03 埋土
 4. 黒褐色土 (10YR2/3)
粗砂粒多く含む
 5. 黒褐色土 (10YR2/2)
 6. 黒褐色土 (10YR3/2)
黄橙色土ブロック多量含む
 7. 灰黄褐色土 (10YR5/2)
黄橙色土ブロック多量含む



第9図 SX01 ~ 03実測図 (1/30)



第10図 SX05～07実測図 (SX05・06 : 1/30, SX07 : 1/40)

遺物（第8図） 3・4は土師器小皿。3の底部には糸切り痕、4の底部にはへら切り痕（のち板状圧痕）が観察できる。口径は、それぞれ8.8cm、9.3cmを測る。5は瓦器椀。器面風化のためか外面の調整は観察できない。6は平瓦。器面の風化が激しいものの、凹面には布目痕と模骨痕が確認できる。

SX03（第9図） 調査区南壁際で検出した土坑で、SE01、SX01・02に切られる。南側の一部は調査区外に続く。南北・東西とも1.6m以上の規模を有するが、形態・規模とも把握することができない。検出面からの深さは最大14cmを測る。調査区南壁面での埋土は、暗褐色土（10YR3/3）の単層であった。出土遺物はなかった。

SX05（第10図） 調査区やや北側で検出した。平面1.21m×0.40mの長楕円形プランを呈し、検出面からの深さは最大18cmを測る。

遺物としては、土師器片（底部糸切り）、瓦器片が出土したが、図化に堪えるものはない。

SX06（第10図） 調査区北側で検出した。平面0.98m×0.56mの歪な楕円形プランを呈し、検出面からの深さは最大20cmを測る。3基程度のピットが重複している可能性があるが、調査時に確認することはできなかった。

遺物（第8図） 7は白磁椀。口縁部が外反する。太宰府分類V-2類に相当か。これ以外に土師器片、瓦器片が出土した。

SX07（第10図） 調査区北端で検出し、大部分は9次調査5区に続いている。平面4.74m×3.18mの歪な楕円形を呈する。検出面からの深さは、最大82cmを測る。平面・断面の形状、土層観察の結果から、幾度かの掘り直し、あるいは複数の遺構が切り合っている可能性がある。

なお、9次調査5区では、SX01と呼称し、9次調査分のみ既に報告（『御笠の森遺跡II』）を行なっている。

遺物に関しては、一括して『御笠の森遺跡II』に掲載しており、白磁椀（太宰府分類V類）、白磁皿（太宰府分類VI類）、同安窯系青磁、中国産陶器壺・鉢・甕、東播系こね鉢、土師器、瓦器、滑石製石鍋などが出土している。

（4）ピット

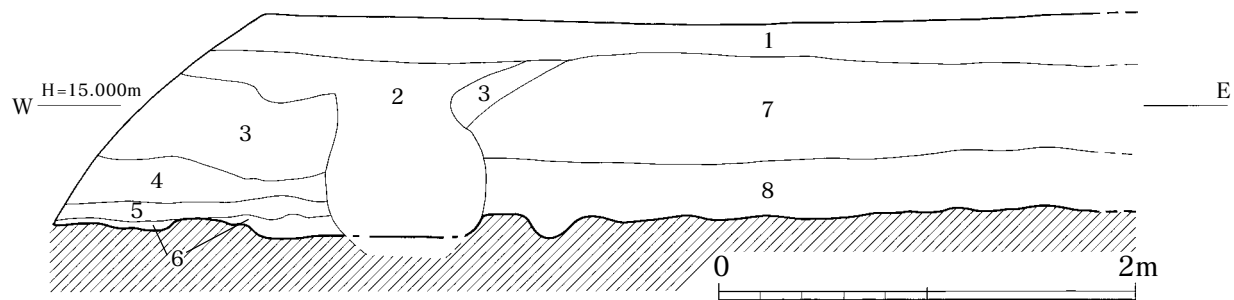
調査区内には、建物に復元できないピットも多数検出されている。ここでは図化可能な2点の遺物について紹介したい。

遺物（第8図） 8は白磁皿。太宰府分類II類か。9は土師器小皿。底部へら切りの可能性が高いが判然としない。

（5）調査区南壁面

調査区南壁面（第11図）に、「御笠の森」との関連が想定される堆積土（7層）を確認した。ここで興味深いのは、壁面精査時に少量の土師器片・瓦器片（小片のため図化に堪えない）が出土した点である。これらの遺物は、7層から出土したものか、7～8層から出土したものか、十分に把握することができなかったが、少なくとも7層は中世以降に堆積したと判断することができる。

その成因については、明確な人為的痕跡を確認できない一方で、地形的に自然堆積したとも考え難く、中世期（12世紀）以降に「御笠の森」が一部整備された可能性も指摘できよう。



- | | |
|---------------------------|--------------------------|
| 1. 浅黄橙色土 (10YR8/3) 真砂土、客土 | 2. 灰褐色土 攪乱埋土 |
| 3. 浅黄橙色土 真砂土、客土 | 4. 褐灰色土 (10YR4/1) 粘質、耕作土 |
| 5. 黄灰色土 (2.5YR4/1) | 6. 極暗褐色土 (7.5YR2/3) |
| 7. 黒褐色土 (7.5YR3/2) しまりない | 8. 黒色土 (7.5YR2/1) |

第11図 調査区南壁面土層実測図 (1/40)

遺物 番号	図	種類	器種	出土 地点	法量cm ①口径 ②器高 ③底径 ④最大径 (受部径を含む)	形態・技法の特徴	A胎土 B焼成 C色調	備 考
1	8	土師器	杯	SE01	①(16.2) 残存高2.55	内外面体部回転ナデ、 底部不定方向ナデ	A密。1mm以下の白色粗砂僅 かに含む B良好 C内:灰白 10YR8/2 外:灰白10YR8/2 ~ 灰白3.5Y8/2	
2	8	土師器	碗	SE01	③(6.2) 残存高1.2 高台高0.5	内面不定方向ナデ、外 面回転ナデ、高台貼付 後回転ナデ	A密。1mm程の白色粗砂少量含 む B良好 C内:灰白2.5Y8/2 外:灰白10YR8/2	
3	8	土師器	小皿	SX02	①8.8 ②0.75 ③(7.4)	底部内面不定方向ナデ、 底部外面糸切り、他は 回転ナデ	A密。1mm程の白色粗砂・金雲 母を少量含む B良好 C内: にぶい黄橙10YR7/2 ~ 7/3 外: にぶい黄橙10YR7/3	
4	8	土師器	小皿	SX02	①(9.3) ②1.55 ③7.35	外面底部回転ヘラ切り 後板状圧痕、内面底部 1/3不定方向ナデ	A密。1mm以下の白色粗砂ごく 僅かに含む B良好 C内:浅黄 橙10YR8/3 外:浅黄橙10YR8 /3 ~ 8/4	
5	8	瓦器	碗	SX02	①(16.3) 残存高4.4	体部内面ミガキ、体部 外面は摩滅の為不明瞭 だがミガキか、他は回 転ナデ	A密。1mm以下の白色粗砂ごく 僅かに含む B良好 C内:灰 N6/ ~ N4/ 外:灰N6/ ~ 4/ 灰白 5Y8/1	
6	8	瓦	平瓦	SX02	残存縦8.3 残存横5.3 厚1.2	凹面布目痕 凸面器表 面摩滅の為調整不明	Aやや密。粗砂をごく僅かに 含む Bやや不良 C凹:灰白 7.5Y8/1 凸:灰白5Y7/1	凹面に模骨痕
7	8	磁器	白磁	SX06	残存高1.45	回転ナデ後施釉、表面 一部気泡により釉が粒 状になる	A密。B良好 C内:灰白5Y7/1 ~ 7/2 外:灰白7.5Y7/1 ~ 7/2	太宰府分類 V-2類か
8	8	磁器	白磁	SP11	③(4.5) 高台高0.4 残存高2.15	高台を除く全面に施釉、 高台削り出し	A密。1mm以下の白色粗砂僅か に含む B良好 C内外共:灰白 7.5Y7/1	太宰府分類 II類か
9	8	土師器	小皿	SP17	①(10.0) ②0.9 ③(7.9)	底部内面不定方向ナデ、 底部外面不明瞭だがヘ ラ切りか、他は回転ナ デ	A密。1mm以下の白色粗砂、赤 色粒子を僅かに含む B良好C 内:にぶい橙5YR7/3、橙5YR7/ 6 外:にぶい橙7.5YR7/4 ~ 6/ 4	

第2表 出土遺物観察表

Ⅳ．まとめ

1．各遺構の時期

今回の調査で出土した遺物は決して多くなく、よって、時期比定可能な遺構も限られている。図
化可能な遺物が出土した各遺構の時期は、次のとおりである。

SE01：土師器杯の口径等から判断して、12世紀前半から中頃の可能性が高い。

SX02：土師器皿の口径等から判断して、13世紀前半が下限となる。

SX06：白磁碗から判断して、11世紀後半～12世紀前半の可能性が高い。

SX07：中国産陶器類から判断して、12世紀後半から13世紀が下限となる。

これ以外の遺構の年代については、具体的な検討ができないが、ほぼ全ての遺構（SX03以外）
から瓦器片が出土している点を考慮すれば、12世紀を主体とした遺構群である可能性が高いとい
えよう。

2．中世～近世遺構の広がりと「御笠の森」

御笠の森遺跡は、弥生時代から17世紀後半までの集落遺跡であり、その消長に関しては、『御笠
の森遺跡Ⅱ』に示したとおりである。

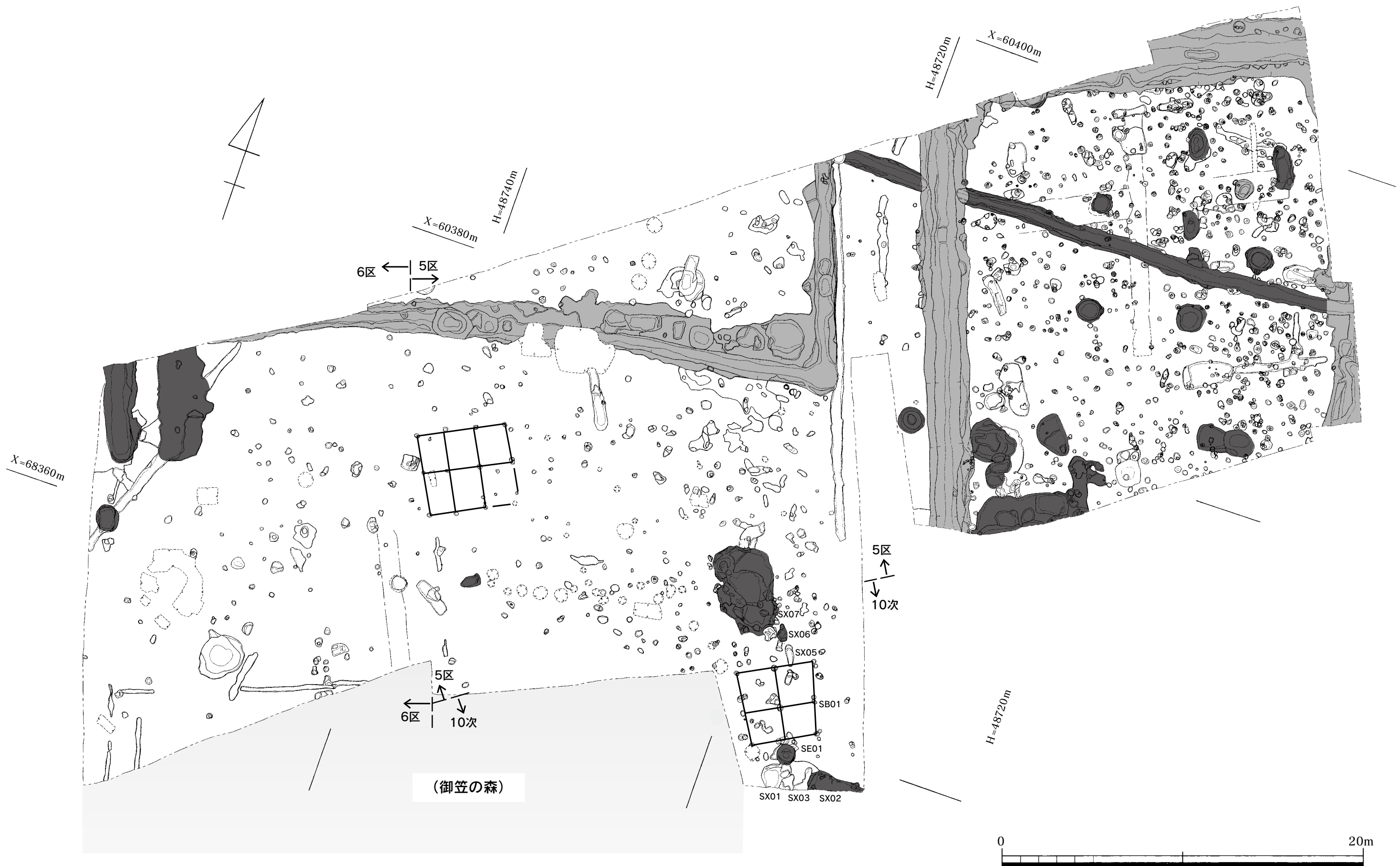
ここでは、遺構群と近接する「御笠の森」との時間的・空間的関係を考えてみたい。第12図は、
9次調査5・6区と今回の調査区（10次調査）の遺構配置図である。まず目に付くのは、11世紀
後半～13世紀の井戸跡や土坑が比較的密に分布する点であり、特に興味深いのは10次調査SE01
やSX02などが御笠の森に近接して検出されている点である。

一方で、16～17世紀の遺構は、区画溝を除いては僅少であり、10次調査地点にいたっては全
く検出されていない。さらに第13図を見てわかるように、9次調査5～6区で検出した区画溝は
御笠の森を大きく北側に避けるように配置されている。

では、こうした遺構分布の相違は何に起因するのだろうか。当然、単なる偶然を想定することも
できるが、ここでは、11～13世紀と16～17世紀とでは、「御笠の森」に対する意識、あるいは
森自体の規模が変化している可能性を指摘しておきたい。Ⅱ章で紹介したとおり、かつて御笠の森
には、村の鎮守となる宗教施設（成立時期不明）が存在しており、これに伴って森自体の神聖化が
進んだ可能性がある。また、調査区南壁面で観察された12世紀以降の堆積土（盛土？）の存在は、
ある時期に当該地の整備（マウンド規模の拡大を含む）を行った可能性を示すものといえる。

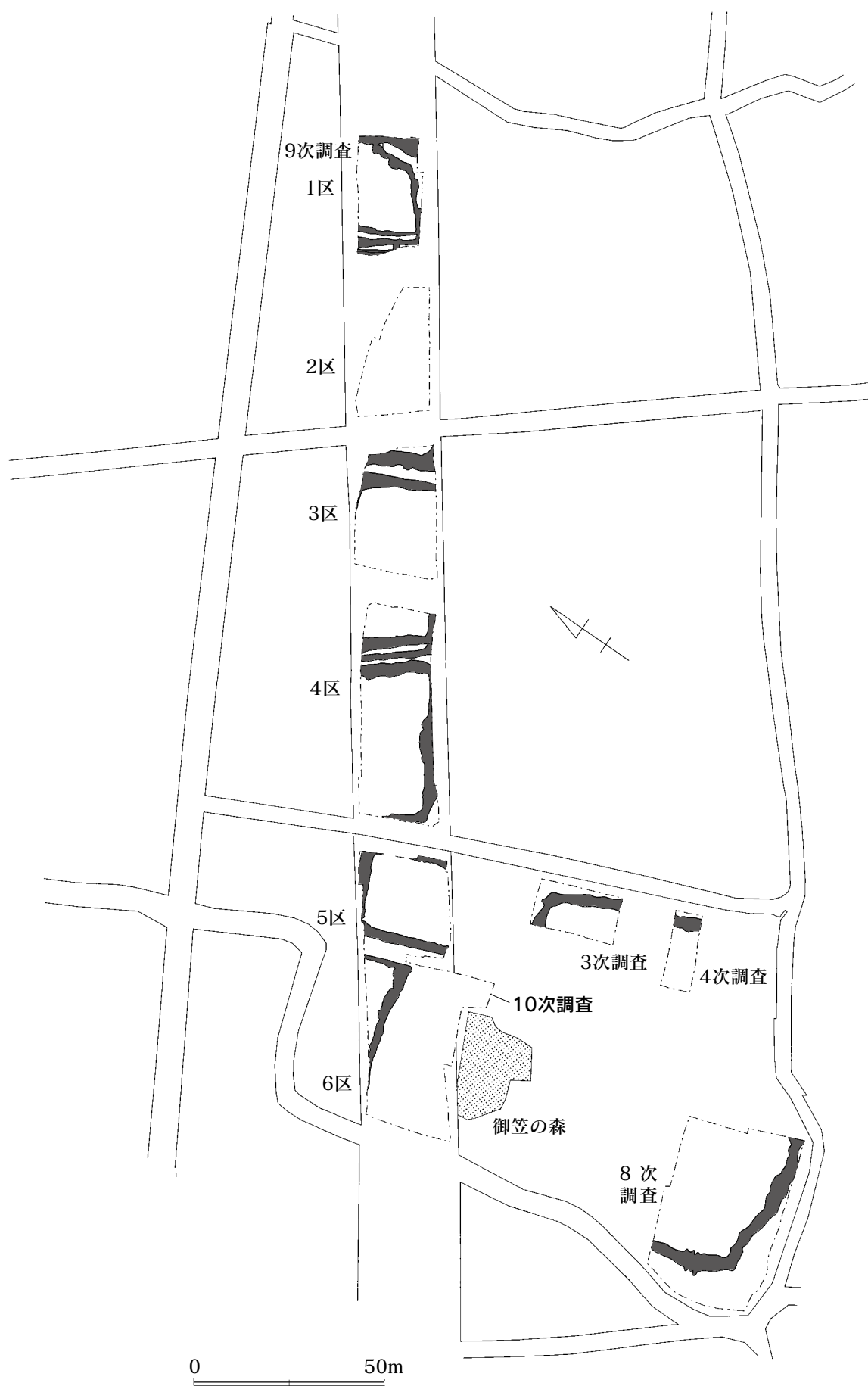
つまり、御笠の森を「神聖な場所」として、より意識するようになったため接する位置を避けて
遺構を配置した、あるいはマウンドが広がったため、物理的に遺構配置が制限されたという2つの
想定が可能であろう。

現時点でこれ以上言及することはできないが、今後、発掘調査成果に基づく集落動態と「御笠の
森」がどのように関連するのか、新たな課題が提示されたといえよう。



第12図 第9次調査5・6区、10次調査遺構配置図 (1/200)

■ 11～13世紀 ■ 16～17世紀



第13図 第3・4・8・9次調査区画溝配置図 (1/1,500)

圖 版



(1) 調査区全景 (北から)



(2) SB01完掘状況 (北から)



(1) SE01完掘状況
(西から)



(2) SX01完掘状況
(北から)



(3) SX02完掘状況
(北から)



(1) SX07完掘状況
(北から)



(2) 調査区南壁面
土層観察状況
(北から)



(3) 調査区西壁面
土層観察状況
(東から)

報 告 書 抄 録

ふ り が な	みかさのもりいせき さん							
書 名	御笠の森遺跡 Ⅲ							
副 書 名								
巻 次								
シ リ ー ズ 名	大野城市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第79集							
編 著 者 名	林潤也							
編 集 機 関	大野城市教育委員会							
所 在 地	〒816-8510 福岡県大野城市曙町二丁目2番1号 電話092（501）2211							
発 行 年 月 日	2008年3月31日							
ふ り が な 所 収 遺 跡 名	ふりがな 所 在 地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
みかさのもりいせき 御笠の森遺跡 第10次調査	ふくおかけんおおのじょうしやまだ 福岡県大野城市山田 2丁目228-1			33° 32' 48"	130° 28' 23"	20021107) 20021218	98㎡	駐車場 建設
所 収 遺 跡 名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
御笠の森遺跡 第10次調査	集落遺跡	平安～鎌倉	掘立柱建物跡 井戸跡、土坑	土師器・ 瓦器・白磁				
要 約	御笠の森遺跡は、これまで10回にわたる発掘調査が実施され、弥生時代から江戸時代（17世紀後半）の集落跡であることが明らかとなっている。 本書に掲載した第10次調査は、市指定文化財「御笠の森」の隣接地に位置し、狭小な調査面積にもかかわらず、12世紀代を主体とする掘立柱建物跡や井戸跡、土坑などを検出することができた。周辺の調査成果も合わせ、集落景観の復元や集落変遷を考える上で興味深い調査成果を得たといえる。							

大野城市文化財調査報告書

第79集

平成20年3月31日

発 行 大野城市教育委員会

福岡県大野城市曙町2-2-1

印 刷 株式会社 三光

福岡県福岡市博多区山王1丁目14-4